タイ国の幼児教育

三宅和夫

(一) はじめに

わたくしは、昨年三月より十五か月の間、タイ国の首府バンコックにある国際児童研究所（International Institute for Child Study）のユネスコ研究員としてタイの子どもの発達の研究に従事してまいりました。ある特定の社会の中での子どもの発達ということを考える場合に、子どもたちのおかれている社会環境、文化環境の影響をじゅうぶんに考慮に入れなくてはならないことは改めて申し上げるまでもないことですが、わたくしも、まったく異なった社会、文化の中に育っていく子どもたちについていろいろとしらべるうちに、子どもの発達のようすというものが、日本の場合とは非常にちがうことがよくわかり、いまさら環境の影響の大きいことを痛感しました。わたくしは長い間、日本の子どもに接しているうちに、だいたい子どもは「これこれの場合にはこれこれの行動をとるものだ」というような観念をいつのまにか持つようになっていたわけですが、タイの子どもに接したとき、しばしばそうした観念があてはまらないので、びっくりしましたし、子どもについて一般化することはできないものだということをしみじみ感じたわけです。そこで、ここでは、タイの子どもが幼児時代には、家庭でどのような生活をしており、母親はどのようなしつけ方をしているのかということ、また

幼稚園の教育はどのようにおこなわれているかを中心にのべ、同時に子どもの行動でとくにどんな点が、めだって日本の子どもとちがうかについてもふれ、しつけ方、教育の仕方と子どもの人間形成との間の関連について考えてみたいと思います。

(二) タイの家庭での幼児教育

タイでは、子どもが成人するとかならず別に世帯をつくるので、家族は両親と子どもだけから成りたっているのがふつうです。ですから、子どもの養育ということは、もっぱら母親の責任で、これを時として父親および年長の子どもが手つだいます。ですから年よりがいるためにおこるような、しつけの面でのいろいろな問題は、おこりません。ところで母親の育児態度ですが、日本とたいへんにちがうのは、あまり手をかけてめんどうをみないということです。わたくしは、いつも日本の母親が子どものことによい意味でも、わるい意味でも関心を持ちすぎると思うのですが、タイでは、母親が幼ない子どもをあまやかしすぎたり、干渉しすぎたりすることは、ほとんどありません。外で母親が小さい子どもをおんぶしたりだっこしたりして連れて歩くのを見ることもあまりありませんでした。子どもは生まれて間もなくから、大きな竹でつくったゆりかごに入れられて育ちます。このかごは子どもがつかまって立っても首が出るくらいに深いものですから、母親がいなくてもはいでたりおちる心配はありません。また、天井から四本のつなで吊り下げてあり、一方の側面にひもがついていて、ねかすときには、このひもをひいてかごを静かにゆらしてやります。添寝をすることはあまりありません。またかごの内部は、子どもがうごきまわれるほどに、じゅうぶんに広いので、すこし大きくなっても中であそぶこともできます。時には、だいてやることもありますが、このだき方がまたたいへんにちがいます。片手だきと申したらよいのでしょうか、右手で、子どもを右わき腹にかかえるようにするのです。子どもはちょうど母親の腰骨のところにのるようなかっこうになります。このだき方は、親にとっても子どもにとってもらくではありません。日本式のおんぶやだっこなら、子どもは完全に親に依存していればよいのですが、タイの場合には子どもも相当に緊張していなくてはなりません。これらのことからタイでは子どもを小さいときからなるべく自立の方向へとむけるようなしつけ方が自然となされているということがおわかりでしょう。歩きはじめは日本とくらべて早いようで、八か月ころに歩きはじめるのが多いようです。おむつをあまり使用しないこともこのことに影響があるかもしれません。おむつを使わないと言えば、排泄のしつけはきびしくないのです。家の中が板の間のせいもあってか、おもらしをしても親はさわいだり、叱ったり

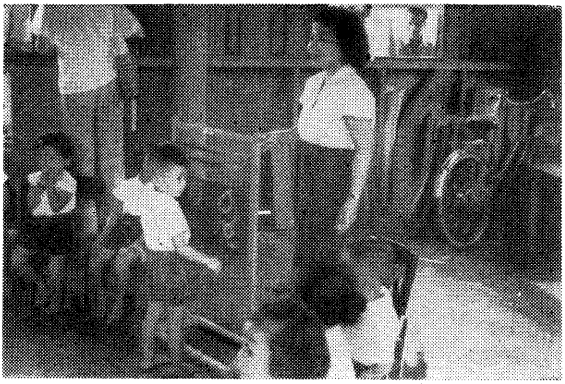
しません。離乳も徐々におこなわれ大体二才ころまで、母親のお乳をのみます。また興味のあるのは、下の赤ちゃんが生まれても急に母親からはなされることはなく、時には、お乳を赤ちゃんがのんでいる時に上の子が母の膝にのっているような光景も見られます。そうしたせいもあってか、上の子が下の子をいじめることはほとんどなく、すこし大きくなってもきょうだいげんかはとても少ないのです。

次に罰については、体罰はほとんどおこなわれません。もちろんひどいいたずらをしたときには親は叱りますが、わたくしからみるとほんとうにゆるやかなものです。お行儀については、タイの母親もなかなか気をつけています。いちばんに子どもに教えることは、目上の人に対する礼の仕方です。両手を顔の前であわせるのがタイ人の礼の仕方で、四才くらいの子どもは、みんな上手にします。しかし四、五才の幼児は一般的に言ってそれほどの制約をうけることなく毎日をたのしく遊んですごします。男の子は、ごっこあそびなどに、女の子は人形あそび、ままごとなどに熱中するのは日本とあまり変わりありません。しかし、男の子、女の子のしつけについては、ほとんど差別をつけることはなく、女の子だからといって、とくにお行儀をやかましく言われるということはありません。この国には昔から男尊女卑というようなことはなく、親はすべての子に財産を平等にわけますし、教育も男女に同じようにさせます。ですから小さい時のしつけも自然、男女の間に区別をつけないのです。小学校へ入るのは八才ですが、それまでは、子どもにお手つだいをさせることは、あまりありませんが、例外として、小さい弟妹のめんどうをみるということがあります。めんどうをみるといっても、いっしょにあそんでやるということなので、別にいやだと感じるようなことはなく、けっこうたのしくあそんでいるようです。以上申しましたことでおわかりかと思いますが、一般的にタイの幼児は、日本とくらべると放任的にそだてられ、一方早くから自立させられるようです。また、親の干渉や圧力が少ないせいか、攻撃的な行動や競争的な行動は非常に少ないようです。きょうだいげんかのことは前にふれましたが、仲間どうしのあらそいも観察してみたところ日本とくらべてはとても少ないことがわかりました。あそびを見ても、あまりはげしいものはなく、らんぼうでこまるということをうったえる親はちょっといないようです。これも日本とはとてもちがうところだと思います。

(三) タイの施設での幼児教育

小学校をたずねたときもそうでしたが、バンコック市内のりっぱな施設をほこる幼稚園でも、いなかの小さい村にある施設に行った

いなかの幼稚園　土間、はだしに注意
黒板にかいてあるのはタイの文字



ときでも、いつもわたくしが第一に気のついたことはとても静かな雰囲気がただよっているということでした。小学校や幼稚園のそばを通れば、にぎやかな子どもたちの声が聞こえてくるものときめこんでいたわたくしにはとても意外に思われました。一斉保育がおこなわれているときばかりでなく、自由あそびをしているときでも日本の子どもとくらべたらとても静かです。先生たちに聞いてみても、子どもにとびつかれたり、ひっぱりまわされるということはないということでした。前の節でもふれましたが、施設の中でもけんかはほとんどないようですし、わたくしもとうとう一度もけんかはおろか、とっくみ合ってあそんでいるのも見ませんでした。それでは先生がよほどきびしくしているのだろうとお考えになるかもしれませんが、そうではありません。大きな声を出して叱ることだって日本よりも少ないのです。ここでわたくしはつくづく家庭での育て方の影響の大きいことを身にしみて感じました。この子たちをもっと活発にさせ、競争的にさせることが一概によいとは言えないかもしれませんが、それは幼稚園だけでできるものではないのではないでしょうか。日本でも幼児教育というと幼稚園へ入ってからと世間で考える傾向が今でもあるようですが、すでにその前の家庭教育に何か手がうたれなくてはならないでしょう。ところでタイの幼稚園教育で目につくことは、よみかき、かぞ

いなかの幼稚園児のゆうぎ
これはタイ式のおどりである。

え方の初歩が教えられていることです。これは五才以上の子どもに限られてはいるようですが、そのわけを聞いてみますと、小学校へ入ってから、文字や数字を知らないために非常に能率の上がらないことがあるのでそうするのだとのことでした。そして五、六才の子に教えることはけっしてむりではないし、子どもたちはよろこんでおぼえようとするのだということも聞きました。しかし、それが幼稚園にくる一部の子だけだとしたらかえって後でやっかいなのではないかと思い、この点について、すこし小学校へ行ってしらべたところ、学校によっては、一年生のクラスの下に準備クラス（Pre-Primary Class）というのが一年間もうけられており、そこには、幼稚園へ行かない子で、一年生に入ったら困ると思われる子に対しての準備の教育がおこなわれていることがわかりました。もっともこれは、よみかきや数のことについてだけなのですが、もうすこし範囲をひろめて性格や行動の面に問題がある子どもも入れてやったなら、ちょうど、オーストリヤなどでやっていたような学校幼稚園（Schule kindergarten）のように、よい効果があり、のぞましいのではないかと思いました。考えてみると、日本の小学校では、まったくこういうこころみはないようで、この点ある意味ではタイよりおくれていると言えるかもしれません。次に、タイでも幼稚園の先生は、女の先生が大半ですが、小学校でも女の先生の方が多く、子どもの教育には女の人の方がよいのだという考えが支配的であるということと共に女性の地位の高いことを示しているようです。また、幼稚園でも小学校でも一つのクラスの子どもの数は二十五人以下であって、この点に先生も子どももたいへんにめぐまれております。バンコック市内の幼稚園は設備もよくととのっておりますが、いなかのものはたしかに貧弱であり、遊具なども不足しております。しかしどんな奥地へ行っても、小学校と併設した施設を見ることができたことは、わたくしにとってはおどろきであり、タイの人が子どもの教育に力を入れていることを知って感心もしたようなわけです。ただ子どもたちによい絵本などが与えられたなら、もっとしあわせになるのではないかとつくづく感じました。わたくしがわずかでしたが、日本から持っていった絵本を子どもたちのためにとさし出したときには、とてもよろこばれ、日本の子どもたちがうらやましいと言われました。バンコック市内の幼稚園にはりっぱな遊具もありますし、絵本などもたくさんありますが、ほとんどはアメリカのものです。しかしタイの子どもたちにそんなにぴったりこないものもあるのではないでしょうか。日本でできるよいものが入れられたらなあと思いながら、一方まちを歩くと、日本製のいかがわしいおもちゃが店頭にならべられており、それをタイの子どもたちが買ってあそぶのが思い出され、すっかり考えさせられてしまいました。

（北海道大学）